

『体育指導者としてのバスケの思い出』

元下松高校監督 吉規 喜代二先生

《中学校時代》

過去 50 年位前から現在までを思い出しながら、途切れ途切れの思い出を一本につなげようと思いますが、時代の錯誤や間違いがあるかもしれません、その点悪しからずお許し願います。

昭和 20 年の終戦の年が小学校 6 年生、21 年に旧制光中学校に入学、2 年の時に学制改革で新制中学校が各地につくられた。

旧制中学校は高等学校に昇格、我々は光高併設中学校となり、3 年卒業迄下級生のいない学年であった。当時の光中学校は光駅の東側、現在の光丘高校の近くに在り、友人の関係で 2 年、3 年と室積から片道約 6 キロを徒歩通学した。痩せて背も低かったが、運動神経だけは人一倍発達していた様に思う。運動会のタンブリングはマット運動の跳込み前転など先輩の台の上で開脚の三点倒立をしたり、短縮マラソンでも中学高校合わせて 10 番位でゴールした様に記憶している。

部活はバレー部に所属、防府で行なわれた県体の開会式でも一番後にいる程のチビでした。

9 人制バレーのバックセンターであったが、自分のポジションはもとより、両サイドのカバーまで動きまわっていた様に思う。

秋季県体前の練習後には日も暮れ、帰途 3 キロ位は走って帰宅していた。お陰で持久力もついたのでと思う。

《高校時代》

昭和 24 年光高校（旧制中学は西校舎、女学校は東校舎）東校舎に入学、室積に在ったので歩いて 5 分位だった。

部活は最初中学校の続きでバレー部に入部したが、指導者（男子が門馬先生、女子が猪股先生）の魅力に引かれて 1 年途中でバスケット部に転部、この出会いがなければ現在の私はなかっただろう。3 年生には藤井耿介先輩がおられた。みんな勉強も運動も良く努力していた様に思う。同級生で京都大学一人、山大経済二名（山大の図書館に居た松本君はその内の一人）下級生には元山大附属中学校の校長だった田中健二君もいた。高校になって背も伸び人並みの身長になった。当時は山口大学の光分校（二年課程）が室積にあり、現在中学校の教員をしている徳田先生のお父さんも山口高校から光分校に入学してこられ、技術面で切れのよいバスケットを教わることが多かった。練習試合は武田薬品に頼んで良く相手をしてもらった。東大出の斉藤太郎氏が武田薬品に勤務されており、試合に出られなければ光高校が勝ち、武田が負けそうとなると出てこられて教えてもらったものだ。

徳山地区では布施先生が指導されていた下松工業が強かったが、3 年生の春の地区大会が徳山高校のグラウンドのコートでおこなわれた時に下松工業に勝ち地区大会で初優勝した感激を今でも思い出す。県内では水嶋先生の指導された大津高校が圧倒的に強く、よくもあれだけの身長のある選手が揃ったものだと思う程でまるで外人みたいな感じがした。国体でもベスト 4 の成績だった。今でもその成績は破られていない誠に快挙であった。余談だが持久力があつたので宇部－徳山間の駅伝に引っ張り出され雪の中

を小郡から山口迄走ったことも高校時代の思い出の一つとして残っている。

《大学時代》

昭和 27 年、地元の山口大学教育学部光分校に入学、体育専攻、球技や陸上競技では負けなかったが機械運動は高校時代全く授業で実施してもらわなかったのが苦手だった。

体育の山中先生から鉄棒に蛙がぶらさがっているようだとされたのがくやしくて、上手な友達に教わったり、家の木と木の間に竹で鉄棒の代用品を作り練習した。お陰で夏休み頃には蹴上りも巴も大坂り上りも克服でき、柔軟性や器用さも手伝ってマット運動も跳び箱の転回運動から空転までこなせるようになった。くやしさをバネにしたのが良かったのだと思う。

2 年を終了して中学校の先生になろうかとも考えたが、同じ体育の先生になるのなら 4 年を卒業する方が良いと言われ、当時光高校の先生であった故御園生貢先生や故田村健一郎先生のすすめもあって、昭和 29 年日体大 3 年に編入、井の中の蛙大海を知らずと言うが、目の当たりを見る体操のオリンピック選手の技とそれを支える練習量の多さには驚くばかりだった。寮に入り 1 年生と共に日体名物のエツサッサ等も体験、寮生活も半年ばかり経験したが編入ということで必修の不足単位が八単位あり 1、2 年と共に講義も受けた。

寮の集団生活では不足単位取得が困難と思い夏休みで下宿に変わった。お陰で 3 年の終わり迄には不足単位を全て取ることができた。

4 年になると時間的にも余裕ができたが、1 年生に神奈川の渡辺、東亜学園の御子柴、群馬の大田、日体大女子監督の石川等優秀な選手が入学してきて小生は 2 軍トレーナーとなった。

教員免許をもっていたので夜間高校（都立四商）の授業等のアルバイトを元光中学校の恩師田村先生から紹介してもらい学費の足しにできた。ちなみに家からの仕送りは当時の金額で五千円位だったと思う。熊毛南に勤めての初任給が、八千円だったことを思うと仕送りの五千円も大変だったのではなかったかと思う。

《教員生活》

（熊毛南高校時代・昭和 31～36 年 5 月）

教員生活の第一歩は熊毛南高校。田中勤先生が柳井高校に転出された後に下関工業高校から倉本先生（フェンシング）の後任が決まっていた。3 月終りに光高の田村先生と共に、森山右一校長に面接させてもらった。当時の熊毛南高の体育主任は谷先生で和佐本先生と共に女子バスケットの顧問をされていた。他に坪郷先生（後に田部高校女子バスケットの優勝監督）がバレー部を持っておられた。

面接の結果即断で採用を県教委に通知されたのには驚いた。+α で採用されたのだと思いその勇断には感謝している。翌日の人事移動で森山校長は退職された。籍は上関分校についたが分校が二日、本校が四日の勤務となった。和佐本先生がバスケットの専門委員長をされており、女子はインターハイ出場を何度も果たしていた。その陰には松本正先生や中学校の杉岡先生等の功績も大きなものがあったと思われる。

二人のバスケ専門家がおられ一年目は水泳部の顧問兼バレー部の顧問となる。田布施農業高校の農業用池（25 メートルプール）で水泳の練習をしたり、光高のプールで当時新日鉄の水泳部のコーチの

福田さんから泳ぎ方を習い秋季県体では優勝することができた。

冬の校内マラソン大会では生徒と共に走り全体の一位でゴールした。翌年からは陸上部の顧問となり、毎年中国大会やインターハイや国体に2～3名の選手を出場させた。

陸上の洋書の翻訳を何度も読み、自分のものとして生徒と共に競い合った結果だと思う。岩柳地区では陸上競技役員のスーターまでさせてもらえる程になっていた。

体育人として水泳や陸上競技等自分の専門外の指導を経験できたことは以後指導者として大きな財産となった。

(光高校時代・昭和36年6月～48年3月)

36年6月1日付で母校である光高校に転勤。熊毛南には佐浦綾男先生が来られた。部活では最初の年はバレー部の宗内先生が日体大に転出された後をうけバレー部の顧問となった。バスケットは36年に新任で来られた岩本徳郎(宇部工専)が男子を持たれていた。37年から48年までの11年間女子バスケット部の顧問となり専門種目が生かせる様になった。男子は42年に中国大会に出場し一回戦は松江北に勝ち二回戦で崇徳高と対戦したが二回戦突破はならなかった。センターの畠は新日鉄光で活躍してくれました。

女子は徳山地区大会でも勝てず、長身者を集めても勉強と運動の両立ができず挫折してしまう。何とか強化を考えたのが中学生と顧問とを一緒にしての講習会を年に三回開催して市内中学校のレベルをアップすることであった。藤井耿介先生、原田泰洋先生、上田英俊先生等一緒に受講され徐々に中学校のレベルもアップし、その教え子達が入学して来るようになり、やっと43年徳山地区で優勝することができた。44年の中国予選では、前年度インターハイ出場の防府商業をベスト4のところで対戦するので宿を清算して出ましたが、良く走りシュートと決まってベスト4に残り、浦嶋旅館にもう一泊借金で泊めてもらったが残念ながら3位にはなれませんでした。翌45年もベスト4に残り、3位決定戦で山口先生の下関南と下関南高の会場で対戦、ギャラリーは全部下関南の応援の中、惜しくも3点差で中国大会出場を逃しました。この時のスタートメンバーは中学時代のバスケット経験者は一人のみでしたが身長があり中学時代運動部の所属ならば素人でも努力次第では強くなれることを実証してくれました。

47年には中学校の中国大会に出場した島田中学の主力選手が入学して来ましたが、48年に下松高校に転勤、一年間指導ブランクがあった後、49年には佐浦益子先生が来られ、中国大会初出場をしてくれました。以後は県内バスケット関係者の知るとおりすばらしい伝統をつくってくれています。

(下松高校時代・昭和48年～平成6年3月)

下松高校でも光高校での経験を生かし、下校中の坪井先生、末式中の岡本先生友沢先生等の協力で講習会を年に2～3回開きました。男子チームをもち49年には地区で優勝しました。第一回三戸杯も中国大会に出る防府商業に勝ち決勝は下関中央工業だったと思いますが得失点差で優勝できました。来年はいけるかもしれないと期待しましたが、そのときの2年生のセンターが進学のため退部して県ではベスト8止まりになってしまいました。退部した選手は慶応に進学、一年でやめ一橋に入りました。56年には国体選手の山柿、村山を主力として中国大会に初出場しましたが初戦で広島皆実高に敗れました。富田中学校に藤井房雄先生が勤めておられる時は徳山と地区の1位、2位を争っていましたが、それ以外は大体地区では勝てるようになり、県でもベスト8位だったと思います。

中・高の講習会が結実し、昭和58年には末武中学の男子が中国大会に出場、59年には宇部工業に進学

した河村選手以外の国富、井上、杉原、山大附属光中学から松田、熊本中学から武田が来る。このチャンスを逃してはならないと富田中学の秋本に富田中学校長の志熊先生や両親を通じて働きかけスカウトに成功、センターの小沢は末式中学の野球のファーストで 182 センチでしたが希望してバスケット部に入部、パワフルなプレイを教え良いセンターに成長してくれました。60 年には秋本を頼って富田ファイターズの後輩、柳井中学の小林と末武中学の河野も入学してきて、やっとバランスのとれたチームに育てあげる見通しがつきました。

59 年から始まった 61 高校総体に向けての強化指定校に豊浦、宇部工業、下松の 3 校をあげていましたが、60 年 8 月と 10 月の最終強化大会で勝ってから、渡辺先生や桑原先生の了解のもと下松を指定校にさせてもらいました。

全国選抜優勝大会県予選では準決勝長身の奈良原選手のいる早朝を 66-46、決勝は豊浦を 68-51 で下し、初めて全県大会で優勝できました。テレビで放映もされるということで選手の張り切り様も格別でした。

同中国選抜優勝大会でも準決勝は岡山理大附属高を 69-59 で、決勝では豊浦を 82-60 と下し中国で初優勝できました。中国地区代表として下松と豊浦両チームが全国選抜優勝大会に出場しました。

代々木第二体育館での全国大会は関東地区代表の高崎商業と対戦、前半は 37-32 とリードするが、後半の身長を利してのゾーンで守られリバンドが取りにくくなり、64-77 で惜敗しました。

61 年春の中国高校県予選、ベスト 4 の所で宇部工に 73-85 でまさかの敗北、3 位決定戦を多々良学園とやることになりました。宇部工に負けたショックは大きく、3 位決定戦で前半 23-47 と 25 点も差をつけられた。ハーフタイムの指示は頭の切り替えのみ、天狗になったから鼻をおられたのだ、今やらなければならないプレーに集中せよ！中国一位の自信と誇りはどこへ行ったのだ！本当に実力があるのなら 25 点差をひっくりかえしてみろ！後半には立ち直り 67-66 と 25 点差に 1 点の差をつけて 3 位になってくれました。選抜に同伴された紙村先生はこのチームはあばれ馬みたいなチームだと言われていたが、誉めるのも叱るのもむずかしい時代になりつつあった。

下松での中国大会も苦戦はしたもの、集中した時の力をそのまま維持し準決勝では倉敷工を 67-61、決勝では岡山理大附属を 71-65 で下して選抜に続いて中国大会を制覇してくれました。

6 月のインターハイ予選でも中国予選での負けが薬となり、準決勝では豊浦と三度目の対戦であったが 74-60 で下し、決勝でも宇部工を 80-71 で下し 13 年目にして念願のインターハイ出場権を獲得してくれました。

インターハイ出場が決まり、九州での強化遠征では下松高校でバスケットをし広大に進学し、卒業後は福岡商業高で教員をしている教え子の矢野君の心配で福岡商業高、大濠高、長崎東高、九産大九州高などとゲームを組んでもらいました。福岡商の中倉先生や大濠の田中先生には特にお世話になりました。スピード、パワー、シュート力等学ぶところが多くありました。ちなみに 61 総体は大濠が優勝しています。岡山遠征では理大附属の加藤先生や岡山大学の荒木先生にいろいろなアドバイスを受けました。

8 月、高校スポーツを志す者なら誰もが憧れるインターハイの 1 回戦は、東京代表の国学院久我山高と対戦し、前半は 28-26 と 1 ゴールリードで殆ど互角、後半に入り久我山高が先にペースをつかんだかにみえたが、下松が守りを 1-3-1 のゾーンに変えてから下松のペースに引き戻し、速効のリズムも出始め、粘る久我山を 68-57 と突き放して初戦を飾った。(戦評より)

2 回戦は高さのある、ベスト 8 常連の岐阜農林高と対戦、前半は 28-46 と完全に岐阜農林高ペース、

後半に入り下松が追い上げ残り 4 分、12 点差からオールコートのゾーンプレスで猛反撃、残り 28 秒で 72-71 と下松が逆転、場内大歓声の中、残り 9 秒で再逆転され 72-73 で無念の涙をのんだ。(戦評より) もう 1 分早くプレスをかけていたらと悔いは残りますが、全力を尽くしきって戦った選手の晴々としたさわやかさに私としても救われました。

一度しかない青春を普通科で勉強とスポーツを両立させようと頑張ってくれた選手諸君に多くの良き思い出を残してやることができました。これも一重に保護者や学校の理解と協力、さらには OB、同窓会、県協会、高体連、中体連の皆様方の暖かい御支援のたまものと心から深く感謝いたします。

平成元年にもインターハイ県予選で準決勝で豊浦を下し、決勝で山口高に敗れていますが、61 総体の陰にかくれてしまっています。現在は早川先生がチームを見てくれています、又いつの日かを夢見て、中、高一体となって良い人間関係をつくり、すばらしいチームを育てて欲しいものと願っています。

(国体関係)

まだ光高に転勤して間もない 36 年、初めて秋田国体に出ました。昔は国体に教員の部があり、中国予選を経て出場が決まっていたが、島根県が強く、どうしても予選を勝つての出場権が得られませんでした。

最初の予選に出場したメンバーも全て思い出せませんが、光高での恩師の門馬胤綱先生、猪股正先生、故山本勝美先生、吉村旦先生、安田望先生、松本正先生、岸本勲先生、藤村健治先生、藤山武先生、石田勝作先生、藤井貢治先生等々、外にもあるかもしれませんがぬけていたらお許し下さい。主力は山大、広大の卒業生だったと思います。私も若かったのでフル出場でした。ユニフォームもなく、松本先生が柳井高のユニフォームを借りて来られ、それを着て出場しました。

38 年の山口国体に松本先生は国体事務局に入られた後、私が松本先生の後を継ぎました。吉村監督のもと、若い山田隆道選手や浜村悦巳選手、岩崎克之助選手、小嶋賢選手、寺内保博選手、岩本徳郎選手、宮本和昌選手、中村恵三選手、佐浦綾男選手、寺田辰二選手等入りチームも若返りました。選手確保のため 1 年前に日体大の稲垣先生を通じて選手の勧誘に日体大に行きましたが、皆自分の県に帰るということで山口県までは来てくれる選手はいませんでした。エースの桑原選手は未だ学生で間に合わず、補強選手として県外に余り名前を知られていない武田薬品の絵堂明生選手と稗田稔選手を宇部女子高の講師ということで県教委の承認をもらい補強しました。光市や宇部市、山口市での合宿や大阪の日紡平野(当時実業団 1 位、現在のユニチカ)を宿にして尾崎正敏監督の指導をうけ、日紡や大阪教員との試合を組んでもらいました。特にポジション取りの厳しさは勉強になりました。

昭和 38 年の山口国体は宇部市俵田体育館を中心に行なわれました。初戦は勝ち点のあげられる県との対戦を組んでもらえたとおもいますが、徳島県チームと対戦し予定どおり一勝できました。2 回戦は神奈川県だったと思いますが残念ながら敗れてしまいました。41 年の大分国体、44 年の長崎国体を最後に教員団の現役を吉村監督の引退と同時に引退しました。かなり無理をしたのかもしれませんが、腰椎分離症もあり、引き時の限界ではなかったかと思えます。

(高体連関係)

徳山地区は松本先生を中心に、試合会場は徳山か光が多かった様に思います。予算も十分ではなく、試合運営に為の役員にも充分な手当ても出せず、また審判員も少なく、時には徳山商工と光の決勝を松本先生と私とで自分のチームには厳しく吹いた試合もありました。現在は審判役員も中学、高校、実連、ミ

ニ連と充実しています。松本先生が柳井商業に転出された後を継いで徳山地区の委員となりました。各高校の体育館も完備され、地区大会も光、下松、徳山、新南陽と順番に持ち回りにして各チームの負担をできるだけ平等にしました。県高体連の委員長は山防地区の柏村先生であり、本部の光永先生との密であったこともあり、また高体連のボスの存在だったので、予算的にも何とか中国大会予選やインターハイ予選が外部審判の協力を得て運営できる位になっていました。和佐本先生が委員長の頃は予算が足りないと言われておられたのを覚えています。

柏村先生の後を継いで昭和 57 年からの 5 年間、下松高がインターハイに出場した年まで委員長を勤めさせてもらいました。その後下関工業の佐藤先生、現在は岩国工業の枝折先生に変わっています。在任中は全国の委員長会議や中国大会の運営会議や新人発掘の中国地区強化クリニックを光青年の家を宿舎にし、光高校の体育館を会場にして講師に原田茂氏（元共石監督）を招いて開催したこともあります。選抜県予選のテレビ放映等、県協会の中村理事長の協力を得て実現し、高体連も大いに発展し現在に至っています。特に中村理事長には迷惑をかけたことと思います。現在は小松理事長を中心に各連盟役員一丸となって県協会、実連、高体連、中体連、ミニバス等互いに今迄以上に協力し盛り上げてやっていただきたいと心から願っています。皆様の御活躍と御発展をお祈り致します。

高体連機関誌「南風」第 20 号（平成 10 年 5 月）に掲載